
紅葉

水元あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉

【Nコード】

N4688I

【作者名】

水元あくあ

【あらすじ】

目に映る色とりどりの葉を前にして思い出すことがあるんだ

そうあれはあの時の記憶・・・

いつか見た景色。デジャブの記憶

秋も深まり、紅葉の季節になると決まって思い出すことがある。

遠く離れた関西では銀杏並木がずっと向こうまでつながっていた。サクサクサク・・・と歩いたたびに聞こえる音は、どこか心地よくて、ずっと歩いていたい気持ちになった。

北海道へきて早半年。北海道の秋の訪れは早い。

短かった夏も終わり10月になると、葉が散っていく。

農家の人は、放牧出来ない冬の為に藁を干すことに専念する。

サクサクサク・・・落ち葉を踏みしめると過去の思い出がよみがえる。

以前付き合っていた人のこと。

サクサクサク・・・

関西での生活。

頬にあたる風の寒さで、自分は今北海道という土地にいることが分かるけれど

だけど、夢のようにふわふわもしていて。

いつになればこの感覚が消えるのかと待ち望む。

もうあのころには戻れないのに・・・

紅葉の唄

深紅に染まった紅葉を踏みしめながら、暮れなずむ夕日を眺めていた。

修復工事をしているのか、組み木がある境内の横はやけに静かで珍しく人の姿が見えなかった。

足元にちらばる木の葉。

昔一度ここに来たことがあると、不意に思った。

境内の裏には雑木林があつて、そこには柏、ブナ、そして小さな花々が咲いていた。

学校が終わるとよく、その雑木林にはいつては友達と暗くなるまで、虫取りをしたり、花を摘んだり

鬼ごっこをして遊んでいたものだった。

時々、家の息詰まった空気に耐えられなくなると、立ち寄ったのもこの雑木林だ。

小さいな自分にとってあの雑木林は隠れ家的な要素を果たしていたのだと思った。

「スタンド・バイ・ミー」の映画で主人公たちが隠れ家つくって

たみたいに。

あたりを見回しているとそんな甘酸っぱい記憶が、よみがえってきた。

きっと静かすぎるせいだ。

待ち合わせの時間にはまだ随分時間があった

そして……

久しぶりに京都へ帰ってきたのだ。

北海道のような雄大さはなくても、昔ながらの佇まいや風情がこの街にはある。

「よお」

声ができるほうを向くと、久しぶりに会うあの人がいた。

結婚するつもり……だった人。

私たちは若かったけれど、本当に愛しあいお互い離れ離れになる時間を惜しむようにずっと一緒にいた

あれは確か3年前だったはずだ。

ホワイトクリスマスではなく、小雨の降るクリスマスの夜

渡された小さな宝物をもらったのは。

「これで、いつでもここにこれるね」と

無邪気に肩を寄せ、笑い合っていたあの頃にはもう戻れない。

あの小さな小さな宝物は、今私の手の中に光を失って存在しているのだ。

手の中の恋

「久しぶりだね。元気にやってた？」

こいつとこんな形で再会するのは、ホント何年ぶりだろう。久しぶりに会うからか、会話が何だかぎこちない。

「まあな、近くにある小料理屋でぼちぼちやってるよ。お前は？」
そう聞かれて少し戸惑った。

昔の匂いがよみがえったからだ。

大学時代、私とこいつ たけしたとおる 岳下透は同じサークルに入っていて大学そのものは違っていたけどよく集まって一緒に活動していた。

新入生や、学生に対して色々な企画を提供するそんなサークルだった。

最初は皆と一緒にいるんで、特に岳下を意識してたってわけではないけど

同じ帰り道だったこともあってか自然と話すようになって、仲良くなっていたっけ……。

気がつく私たちは、楽しいときもそうじゃないときもずーっと傍にいた。

たまに大学の授業をさぼって、ぴたっと寄り添って昼まで寝てたりなんかしてると

こんな他愛もない時間がほんとに永遠に続くんじゃないかって

錯覚を起こしたりもした。

でもそんなわけはなくて。

あいつの、会話の内容に困ると髪を軽くかきあげる癖なんかは、ちつとも変わっていないのに

私たちの間にはものすごく距離があるように思えた。

もう戻らない宝物

「そか・・・頑張ってるんだね。 私は・・・」

そうしてサクサクと真っ赤に染めあがった落ち葉を踏みしめ

私は岳下のすぐ前に立った。

「これ。」

そうして私が岳下の前に差し出したのは、3年前あの雨の降る夜にもらった小さな宝物だった。

もう要らない そんな迷子の鍵を預かっていた映画は 確か マイ・ブルーベリー ナイツ。

だけど、もうこの戻らない宝物は、迷子の鍵なんかじゃない。

岳下は苦味つぶした顔をしてそこに立っていた。

二人の影がゆれるだけで二人の心の距離は縮まるはずなんかないんだ。

そして岳下はゆっくり私の手の中から鍵を抜き去った。

二人ともしばらくそのままじっとしていた。

どこかで夜を知らせる鐘の音が遠くから聞こえていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4688i/>

紅葉

2010年12月25日23時11分発行